The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学新入生たちによる外出自粛生活のオートエスノグラフィ ： 文集「パンデミックを歩く」を題材に
Author(s)	宮前, 良平
Citation	共生学ジャーナル. 2021, 5, p. 186-206
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

大学新入生たちによる外出自粛生活のオートエスノグラフィ
―文集「パンデミックを歩く」を題材に―

宮前　良平*

Discussion of Auto-Ethnography Written by New Students during the Quarantine
Based on the book "*Walking in the pandemic*"

MIYAMAE Ryohei

要旨

本稿は 2020 年度大学新入生たちによるオートエスノグラフィの内容を分析することにより、新型コロナウイルスの感染拡大のための外出自粛生活中のかれらの生きられた経験を読み解いていく。本稿におけるオートエスノグラフィは筆者による授業「エスノグラフィを書く」の受講生たちによって授業の課題として書かれたものである。受講生 17 名は全員大学 1 年生であり、所属学部は文学部がやや多いもののバラけていた。本稿では、提出されたオートエスノグラフィの中から 3 篇を選び分析を行った。その結果、コミュニケーションの取りにくさ、オンライン授業における学び、ソーシャル・ディスタンスが強いられる社会における共生などへの洞察を読み取ることができた。これらのことから、オートエスノグラフィ執筆を通して、彼らの生きる世界を彼ら自身で解釈し直すことが可能となったと考えられる。

キーワード　オートエスノグラフィ、新型コロナウイルス（COVID-19）、生きられた経験、文集、リモート授業実践

* 大阪大学大学院人間科学研究科・助教・miyamae@hus.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

本稿は、2019 年に発生し 2020 年には世界的なパンデミックとなった新型コロナウイルス（COVID-19）の感染予防のために、大学へ通うことができなかった大学新入生たちを対象とし、かれらがこの世界的な出来事をどのように生きていたのかを明らかにする。本稿の著者である私は、大阪大学の共通教育科目のひとつである「学問への扉」の中の「エスノグラフィを書く」という授業科目を担当していた。もともとは授業中にフィールドワークに行き、エスノグラフィを書くという予定だったのだが、新型コロナウイルスの感染拡大を踏まえ、自らの自粛生活の「生きられた経験」（岡原・小倉・澤田・宮下 2014）を記述してもらうことを授業のメインテーマに変更した。本稿は、この授業記録でもある。

受講生たちの生きられた経験を記述してもらうために当授業で採用したのがオートエスノグラフィという手法である。オートエスノグラフィとは、端的に述べれば、自らを対象として書くエスノグラフィのことである（Ellis and Bochner 2000）。昨今、オートエスノグラフィにおける方法論的な広まりも見せており、『共生学ジャーナル』にも研究成果（冨安 2019）が掲載されつつある。

オートエスノグラフィには以下の三つの利点があることが知られている（沖潮（原田） 2013）。①研究をはじめるのが容易である②書き手と読み手の自己省察を喚起し自己変容を促す③自己の意味世界を再構築することで様々な現象を捉えかえすことが可能となる。上記の三点を踏まえれば、大学一年生が新型コロナウイルスの自粛生活を書き記すという実践を行う上で、オートエスノグラフィが適切な方法であると思われた。つまり、いわゆるフィールドワークを必要としないため、リモートでの授業での対応が可能である点、オートエスノグラフィを執筆したり、それを受講生と読みあったりすることで、自粛生活という「社会的現象」を様々な視点で論じることが可能となる点、それゆえ遠隔授業下においても教育的効果が期待できる点で優れた方法であると思われた。

そこで、本稿では、「エスノグラフィを書く」の受講生たちが書いたオートエスノグラフィの内容を分析することで、2020 年度に大阪大学に入学し

た大学一年生が自粛生活をどのように過ごし、どのように捉えていたのかを明らかにする。

2. 新型コロナウイルスに対する社会の対応

2.1 日本国内の感染状況

上記の目的「2020 年度に大阪大学に入学した大学一年生が自粛生活をどのように過ごし、どのように捉えていたのか」を明らかにする前に、2020 年 9 月 30 日現在までの日本での新型コロナウイルスの感染状況及び社会的動向、大阪大学の 3 月から 4 月の動きについて簡単にまとめていく。

新型コロナウイルスが日本で初めて確認された 1 月 16 日から現在に至るまで、いくつかの波はあるものの継続して感染例が確認されている。2020 年 9 月 30 日時点での日本国内での症例数は 83,010 件、死者数は 1,564 名である（厚生労働省 2020、図 1 も参照）。

新型コロナウイルスの国内での流行は、社会的な関心度の高まりとして大きく二つの波に分けることができる。もちろん、流行の波に明確な定義はなく、本稿における区分も、オートエスノグラフィがどのタイミングで執筆されたものかを理解しやすくなるための暫定的なものにすぎないことに留意してほしい。

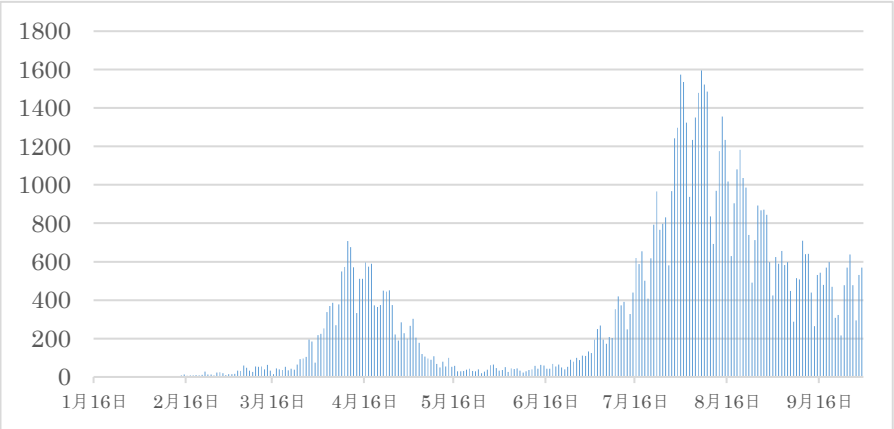

図 1　日本国内における新型コロナウイルス感染者数推移（1 月 16 日～9 月 30 日）

それでもあえて第一波を指摘するとすれば、単日の陽性者数が初めて 100 人を超えた 3 月 27 日から、全都道府県で緊急事態宣言を解除した 5 月 25 日までとなるだろう。この間の陽性者数は 15,357 名であった。この前後での国内の主な動きとしては、全国の小中学校の臨時休校（3 月 2 日）、東京五輪の延期（3 月 24 日）、東京など 7 都府県に緊急事態宣言を発令（4 月 7 日）、全都道府県に対し緊急事態宣言を発令（4 月 16 日）、緊急事態宣言の解除（5 月 25 日）などがあった。

第二波については、本稿では全国での新規感染者数が 100 名を超えた 6 月 28 日を始点とする。本稿執筆時である 9 月 30 日までの間の感染者数は 64,811 名であり、日本国内で全国規模の緊急事態宣言やそれに準ずるロックダウン的政策は取られていない。むしろ、全国的な旅行を奨励するいわゆる「Go To トラベル」キャンペーンや飲食店の利用を推進する「Go To イート」キャンペーンが行われている。

第一波と第二波の大きな違いとして死亡率の大幅な減少を指摘しておきたい。第一波の期間中の死者数は 803 名であった。死者数を感染者数で割ることで死者率を算出すると 5.2%である。それに対して、第二波中の死者数は 600 名であるので、死者率は 0.9%である。しかしながらこの数値も 9 月末日時点のものであるし、たとえ死亡率が低くとも感染者数が増えることで医療崩壊が起きるリスクは高まるので、死者率が低いからといって「コントロールできている」とか「安全である」とは一概に言えない。

2.2 大阪大学の主な動き

このような社会状況の中で、大阪大学はどのように新型コロナウイルスに対応してきたのだろうか。第一波の感染拡大期である 2020 年 4 月までの大まかな動きをまとめる。

大阪大学が新型コロナウイルスについて第一報を掲載したのは 1 月 27 日であった（大阪大学 2020a）。この時点では、国外（主に中国）での感染拡大への注意喚起という性質上、不要不急の渡航を中止することを求めるにとどまっていた。国内での予防においては、「人混みを避け、マスクの着用・手洗いなどの感染予防に努めて下さい」と述べるにすぎなかった。

しかしながら、大阪府内での感染拡大が拡がる中、3 月 19 日には令和 2

年度のいちょう祭の中止を決定し、3 月 23 日には西尾総長のコメントがホーページ上に掲載された。また、4 月 2 日には 3 月まで大阪大学に在籍していた学生の感染が初めて確認された。感染拡大の動揺が学内にも広がる中で、4 月 8 日には大学独自の活動基準を設けた上で、緊急事態宣言の発令に応じて、「メディア授業のみの実施」「学部学生・大学院生の登校禁止」「課外活動の全面停止」を決定した（大阪大学 2020b）。

本研究で主な対象とする大阪大学学部一年生は、上述の対応によって、4 月初頭の履修登録指導以外での登校が制限された。主に大学一年生が履修する共通教育に関しては、5 月 20 日付の授業担当教員向け通知で春夏学期はすべてメディア授業で行うことが通知された。6 月以降、それぞれの学部が主催して新入生懇親会のような会合を開くケースも見受けられたが、学部によって対応はばらばらであった。8 月に私が受講生にこれまで何回くらい大学構内に立ち入ったかと尋ねると、学生の多くは 5 回程度しか入構していないとのことだった。

3. 学問への扉「エスノグラフィを書く」

このような状況下で、私は「エスノグラフィを書く」という授業を担当した。当授業は「学問への扉」という大きなくくりの一部として位置づけられる。「学問への扉」とは主に学部一年生が受講する少人数セミナー型の科目である。大阪大学全学教育推進機構の（2020）によると、「学部・学科を問わず、大阪大学で『学び』をスタートさせる学生は、高校までの受動的で知識蓄積型の学びから、主体的で創造的な学びへと転換する必要があり」、「『課題・文献など一つの内容をもとにアカデミック・スキルズの指導を含む、大学における学びの基礎科目』として『学問への扉（愛称『マチカネゼミ』）』を設定してい」るとのことである。

「エスノグラフィを書く」は、エスノグラフィについての知識を学ぶだけでなく、実際にエスノグラフィを書いてみることを目的とした授業である。授業は以下のように進められた（表 1）。

表 1 授業スケジュール

日程	授業内容
4 月 22 日	オリエンテーション①（授業について）
4 月 30 日	オリエンテーション②（受講方法について）
5 月 13 日	ガーフィンケル著『カラートラブル』講読 エスノグラフィとは何か①
5 月 20 日	エスノグラフィとは何か②
6 月 3 日	中間レポートの講評
6 月 10 日	エスノグラフィを読む① 課題：石岡 丈昇 2011「対象化された貧困──マニラのボクシングジムの存立機制」『理論と動態』4: 42–58。
6 月 17 日	エスノグラフィを読む② 課題：丸山 里美 2006 「野宿者の抵抗と主体性──女性野宿者の日常的実践から」『社会学評論』56(4): 898–914。
6 月 24 日	エスノグラフィを読む③ 課題：近藤有希子 2019「悲しみの配置と痛みの感知──ルワンダの国家が規定するシティズンシップと人びとのモラリティ」『文化人類学』84(1):58–77。
7 月 1 日	エスノグラフィを発表する①
7 月 8 日	エスノグラフィを発表する②
7 月 15 日	エスノグラフィを発表する③
7 月 22 日	エスノグラフィを発表する④
7 月 29 日	まとめ

授業は主に 3 つの段階に分けて行われた。第一段階（4 月 22 日から 6 月 3 日）では、授業のオリエンテーションとエスノグラフィの概説を行った。いわば、座学形式の授業であった。第二段階（6 月 10 日から 6 月 24 日）では、エスノグラフィを用いて書かれた論文の講読を行った。いわばゼミ形式の授業であった。その際課題論文は文化人類学のみならず、社会学に含まれるような論文も扱った。第三段階（7 月 1 日から 7 月 29 日）では、受講生が自らのオートエスノグラフィを発表し、それに対して他の受講生からフィードバックを得るという形式の授業を行った。いずれも大阪大学 CLE 内

の「Blackboard」という映像配信システムを用いた。

本講義の受講生は 17 名で、全員が一年生であった。女性 10 名、男性 7 名であった。所属学部は文学部 9 名、外国語学部 5 名、工学部 2 名、歯学部 1 名であった。出身は大阪府 4 名、大阪府以外の近畿地方 3 名、愛知 2 名、岡山 2 名、そのほかに埼玉、東京、秋田、熊本、石川などの出身者もいた。受講生の中には、実家で授業を受けている学生も少なくなかった。

本講義の中で、自粛生活中のオートエスノグラフィを書くという課題を三度にわたって課した。新型コロナウイルスの感染状況の異なるそれぞれのタイミングで、受講生たちにオートエスノグラフィを執筆してもらった。一度目の締め切りは 5 月 6 日で、これはちょうど第一波が収束に向かい始めた時期にあたる。二度目の締め切りは 5 月 27 日で、これは緊急事態宣言が解除され、感染者数も落ち着きを見せていた時期にあたる。三度目の締め切りは、受講生によって異なるのだが、6 月 24 日から 7 月 15 日の間に設定した。これは落ち着いていた感染者数が再び増加の一途を辿り、第二波へと突入し始めた時期にあたる。提出されたオートエスノグラフィは担当教員である私（宮前）が読み、一人ひとりにコメントした。そのコメントをもとに次の締め切りに向けてエスノグラフィを書き直したり書き足したりする学生もいれば、まったく新しいエスノグラフィを執筆する学生もいた。このようにして、延べ 51 編のオートエスノグラフィが集まった。

第三回目の締め切りで集められたオートエスノグラフィを最終原稿として、文集「パンデミックを歩く」を製作した（図 2 参照）。文量は、62564 文字、A5 判で 136 ページにも及んだ。次章で紹介するオートエスノグラフィは、文集「パンデミックを歩く」に収録されたものである。なお、受講生から公開の許可を得ることができたオートエスノグラフィについては、宮前のウェブサイト（https://ryoheimiyamae.com/）から閲覧可能である。

図 2　文集「パンデミックを歩く」表紙

4. 文集「パンデミックを歩く」の内容分析

本文集に寄せられたオートエスノグラフィの内容は多岐にわたる。具体例を挙げれば、「新たな生活様式への適合」「トイレットペーパーの買い占め」「自粛生活中の疎外感」「芸人とファンの関係」「インターハイの中止」「大学における学びとは何か」「マスク着用によるディスコミュニケーション」「自粛生活中において着飾ることの意味」「SNS の使い方」などがあった。

その中でも大まかな傾向をつかむために、分析ソフトである「KH Coder」（樋口 2020）を用いて、本文全体を通して頻出語をリストアップした。その結果、「マスク」（72 回出現）や「授業」（68 回出現）、「学校」（53 回出現）、「自粛」（52 回出現）などが高頻度で出現していた。受講生たちにとって、最も身近に新型コロナウイルスや自粛生活を感じさせるものが「マスク」で

あり「（リモート）授業」であるということが推察できる。例えば、マスクであれば、マスクというモノそれ自体を小道具的に書くだけでなく、その心理的作用にまで議論を広げて「私が思うのは、マスクはウイルスではなく人を遮断する役割を持つのではないかということだ」（p.59）と書く学生もいた。

以下では、文集の中から 3 篇のオートエスノグラフィを引用しながら解説していく。新型コロナウイルスについてだけでなく、大学生という自らのアイデンティティについてまで洞察が及んでいる 3 篇である。まずは、KF さんによるオートエスノグラフィを紹介しよう。なお、本文集はすべて縦書きで書かれているため、原則として漢数字を採用している。

> 二〇二〇年四月七日に緊急事態宣言が発令された。学生はすでに大阪城ホールでの晴れ舞台を失っていたが、さらにキャンパスライフも失うことになった。おとなしく自粛生活を始めた学生であったが、ひと月もすると、友人と外食もできず、趣味である週末のスポーツ観戦にも行けず、三日に一回坂を下って食料品を買うだけの単調な生活に飽き飽きしていた。そんな折に、エスノグラフィを書く課題が彼の下に舞い降りた。実際に自分の目で見て感じたものを書くと良いのではないか？そうであるに違いない。間違いなくそのはずだ！……と、学生はこれ幸いと遠出することにした。輝かしい新生活を台無しにした災禍を感じに、そして災禍から逃避するために。（p.6）

ここで彼は、自らのことを「学生」と呼称している。授業中にその意図を聞くと、「『学生』と書くことで自分以外の人にもどこか共通する内容として読んでもらえるのではないかと思った」とのことだった。

彼は、エスノグラフィを書くという課題が与えられたことを利用して、遠出をすることを決意する。これはむしろ、このような口実が無ければ遠出をすることがためらわれるような雰囲気があったことを示唆しているだろう。本文の前半部分で描かれるのは、ロードバイクで亀山までサイクリングに行った道中の出来事である。

> 電光掲示板に光る「不要不急の外出は控えましょう」の掲示を一瞥してペダルを回していくと、山あいの集落に、小さな砂地の広場を従えた

味気ないコンクリート造りの建物を見つけた。先生か誰かの手作りだろうか、ひとけのないその建物の入口には「みんなとあうのをたのしみにまっているよ」の文字があった。子供たちは友達とどれくらいの間会えていないのだろうか。（pp.7-8）

学生は下る舟の無い保津川の清流を土手から眺めながら、イートインの閉鎖されたコンビニで買ったサンドイッチを食べた。（p.9）

彼の自転車行は 5 月ごろのことだそうだが、当時はまだ小中学校は臨時休校の最中であり、保育園も同様の措置が取られていたと思われる。「みんなとあうのをたのしみにまっているよ」の文字が子どもたちの目に触れることは無く、届かないメッセージとして取り残されていた。

オートエスノグラフィの最後に彼は、熊谷晋一郎氏の発言をもとに、率直な思いを吐露する。

「社会と自らの間にミスマッチが生じる人間を障がい者と定義するならば、社会が変化すれば、誰しもが障がい者になり得る。そして、この災禍においては全員が障がい者である」。これは NHK『ニュースウォッチ 9』での医師の熊谷晋一郎氏の発言の要約である。疫病により社会システムは変革を余儀なくされ、学生は鬱憤を溜め、この「新しい生活様式」なるものに適合できずにいる。いつ髪を切りに行けるのか、大学の「キャンパスメンバーズ」の制度を利用して無料で入場できるはずの博物館や美術館はいつ再開されるのか、そもそも大学に行くことができない青年は「学生」と呼ばれるのだろうか……。（pp.11-12）

ここで、一人称を「学生」としていたことに更なる意味が付与されていることが分かる。つまり、世間的、制度的には学生として見なされているけれど、学生であると自認できないでいるという乖離を「学生」という一人称に託していたのだと読むことができる。

では、大学で「学ぶ」ということは、今年度の大学一年生にどのようなものとして映っていたのだろうか。YM さんのオートエスノグラフィから読み取ってみたい。YM さんは、自らの高校時代の思い出を振り返った時に、授

業以外の部分が多く思い出されることに気づく。そして、そういった、授業以外の時間における「学び」の重要性を以下のように述べる。

> 学校＝授業というのは学校生活においてはほんの一部に過ぎない構図であって、それ以外の部分で私たちは多くの経験をしている。そして実際、授業よりもそういった場面で自身の成長を感じたり、振り返ったときに「いい思い出」として記憶に残したりしている。「学び」を与える場が学校であるとしたら、「学び」は授業以外の場面にも多く存在しているのかもしれない、そしてそういった「学び」について考えたとき見えてくるものこそ「学び」の本質なのかもしれない、と考えた。(p.48)

そして、彼女は、課外活動もなく、登校することもできず、「授業のみが行われている」状態のことを端的に以下のように表す。

> 今、キャンパスに通えず自宅等でオンライン授業を受けている私たちはきっと、限りなく学校＝授業という部分的な構図の中にいる。(p.48)

いわば、彼女たちは、大学での学びを授業という形でしか受けられていない。授業外での友人とのおしゃべりやサークルや部活での経験から得られる種類の学びを得られていない。このような「部分的な構図」は、授業の中にも見られる。

> 「本来であれば…」。これは、オンライン授業の中で私が多くの先生方の口から聞いた言葉である。「本来であれば、顔を合わせて会話の練習ができるはずなんですが」、月曜一限のフランス語。「本来であれば、これまで読んできた本の中でこういった事例が挙げられるものにはどんなものがあるか、皆さんで議論してもらうのですが」、月曜二限の一般教養。「本来であれば、皆さんにレクチャラーになってもらって、授業時間内に発表してもらうのですが」、月曜四限の英語。「本来であれば、皆さん顔を合わせて訳文をああだろこうだろってやっているはずなんでしょうけど、zoom になると何だか皆さん他人行儀ですね、敬語まで使っちゃって」、火曜四限の選択外国語。他にもまだまだある。きっと、「本来であれば」得られたはずの学びは、いたるところに存在するのだと思う。会話の練習をしたことで気付く発音の間違い。他の人から聞い

> た本の題名に興味をそそられて読んでみたことで見つかった、新しいお気に入りの作家、その本から学んだ新しい考え方。レクチャラーになったことで普段より気合いを入れて予習した結果得られた新しい文法の知識。訳文について数十分議論して得られた、授業についての相談ができる新しい友達、その人から教えてもらって得られる言語の知識。（pp.51-52）

彼女は、「本来であれば」という教員のことばの裏に、リモートでは得ることのできない種類の学びを感じ取っている。それは、発音の間違いのような授業内容を深く理解することにつながるようなものもあれば、新しい友達を得ることで獲得できる種類の学びもある。彼女は、リモート授業に何が欠如しているかという視点から、いまだ経験したことのない「学び」について想像し考察を深めたのだとまとめることができよう。

さて、本稿では最後に KU さんのオートエスノグラフィを紹介する。KU さんは、他の受講生とは少し違う書き方をしている。その意図を彼は、以下のように説明する。

> コロナウイルスの大流行に関連して、街で見たものや体験したもののことを書いているこのエスノグラフィ。五月六日に書いた内容や筆致と、五月二六日に書いたそれらには、微妙な差があるはずだ。さらにそれを今（七月初旬）に読み、新たに書く感覚とのあいだにも、隔たりがあるに違いない。その微妙なずれに焦点を当てられないだろうか。そのずれには、この数十日間における何かの変化の過程が、色濃く映し出されるのではないか。（p.97）

このように、過去に書いた自らのエスノグラフィを参照しながら、過去の自分に「茶々を入れ」、「くちばしを挟」むという「入れ子構造」（p.98）を駆使しながら、いわばメタエスノグラフィとして書かれている。そのため、本稿において彼のエスノグラフィを引用する際は、「5 月 6 日の彼」「5 月 25 日の彼」「7 月初旬の彼」などと明示することにする。

5 月 6 日時点で、彼はこの自粛期間を以下のように記している。

> この三月から五月にかけては、不思議な時間を過ごしていた。
> 受験合格、入学、新生活のスタート、という自分にとっての一大ライ

フイベントに、まさか新型ウイルスのパンデミックという世界史（誌）的な出来事が重なるとは思ってもみなかった。まさに激動である。しかし実感としては、まったく激動でもなんでもなかった。

受験合格（ネット発表）、入学（入学式なし）、新生活のスタート（引っ越しを伴わない）となれば、それはもう、静か以外の何物でもなかった。大学受験のころの怒涛の勢いとは対照的な、静かな安息を感じるばかりだった。

（中略）

何なのだろう、このすっきりしない、むずがゆい感覚は。

それはよくわからない。（pp.98-99）

自粛生活という非日常は、激動というよりも静かな安息だったという指摘が目を引く。しかしながら、この時の彼は、むずがゆさを感じており、まだその静けさに適応できていない。しかし、5 月 25 日に書かれたエスノグラフィでは、静けさを肯定的に捉えようという心境の変化がみられる。

六日時点でうっすらと感じていた、この quarantine の一側面。すなわち、「（自分を含めた）ある人々にとっては、静かで平穏な巣ごもりである」ということである。医療関係者やサプライチェーン、保育、介護など生活を支えるあらゆる分野の人々、そして今回の経済危機のあおりをもろに受けて生活が困窮している人々を除いた、一部の人々は、煩瑣であわただしい日常から抜け出して、ゆっくりと過ごしている。（中略）四月の全国の自殺者数は暫定値で一四五七人で、前年四月の一八一四人と比べて二割近く減少している。この要因などについては詳細な分析が待たれるが、三月ごろから生活を襲い始めた経済危機により生計が苦しくなり命を絶ったとみられる悲惨なケースが報道されるなどしているにもかかわらず、こうした変化が出ているのは驚きである。例年であれば学校が始まる時期に休校が続いたことで、つらい思いをせずに済んでいる人がいるのかもしれない。また、人と人とが接する活動の停滞によって、人と関わることによる根源的なストレスが軽減されているとも考えられる。（pp.103-104）

つまり彼は、自粛生活期間を「静かで平穏な巣ごもり」と肯定的に捉え、そのことを自殺者数の減少と結びつけながら論じている。しかしながら、同時に、世間は混乱し続けていることも事実である。一方では、静かさに平穏さを感じる人たちもいるが、もう一方では、この静かさにフラストレーションを感じる人たちもいる。この奇妙な乖離を 5 月 25 日の彼は、SNS 上のとあるツイートを頼りに言語化を試みる。

> さて、現在の、“ある人々にとって普段以上に平穏な”この状況を物語るツイートを見かけた。
>
> 「早く自粛解除されてまたみんなで集まってワイワイやりたい人たちの世界」と「この人っ気のない自粛のひきこもり生活が永遠に続いて欲しい人たちの世界」のふたつの世界を用意してくれ、そうすればお前らも俺もそれぞれ好きな方を選んで幸せになれる、お前らは前者の世界に進め、俺は後者の世界に進む（はるゆき @haru_yuki_i）5 月 20 日[(1)]
>
> （中略）
>
> 後者の世界なんか自分次第でいつでもできるじゃんとか言ってる人がいるけど、この自粛生活において引きこもりが正当化されるのは弱い私には生きやすかった（しのびぃ　@LufasMH）5 月 21 日[(2)]
>
> （中略）
>
> 注目すべきなのは、「しのびぃ」氏の述べる「正当化」というプロセスである。普段は学校にせよ会社にせよ、行かざるを得ないと決まっている。そのような社会規範は、とりもなおさず、社会へある程度参加することをよしとして、参加しないことを退けている。しかしウイルスの感染拡大で、普段であれば認められないような生き方が正式に認められた。（pp.106-109）

5 月 25 日に書いたことを読み返しながら、7 月初旬の彼は、「ふたつの世界」への魅力を再び感じている。

> 覚えている。エスノグラフィを中盤ぐらいまで書いて、そこでこの一連のつぶやきを見つけたのだった。見た瞬間、これは書きたいと思った。

「ふたつの世界」、改めて考えても重要な黙示として迫ってくる。人と密接に関わり、それこそ「はるゆき」さんの言うように「ワイワイやりたい」人がいる。その一方で、誰とも接触しないで自分の部屋で独りでいたい人がいる。いわばそれがおのおのの自由だ。しかし、この世界はひとつしかない。

（中略）いまは、こうした対立や衝突に対する一応の打開策として、多数派の言う方を取る、という方式がとられている。人々は投票を通してどちらかの立場を体現すると思われる候補を支持し、そして集計の結果、「多数派の立場」がどちらなのか明確になる。その立場をとる候補者が、政治を行う。

それでも、数が多いのが正義だとは限らない。（pp.109-110）

彼が「ふたつの世界」に魅力を感じているのは、それが多数派によって支配されている、いわゆる「ひとつの世界」のオルタナディブになっているからである。

しかしながら、7 月初旬の彼は、魅力と同時に「ふたつの世界」という発想が人と人とを断絶しあうことになりうるのではないかという惧れも感じ始めている。それはたとえば、ソーシャル・ディスタンスによって社会的のみならず心理的にも距離が取られてしまう可能性があることを意味する。とあるテレビ番組での一幕を彼は例にとる。

テレビ・ラジオでは、もうタレント同士が距離をとって出演するのが当たり前になった。先日（六月二五日）の「アメトーーク！」の「奥さん大好き芸人」の回には愛妻家の芸人六人がそろって出演していたが、もちろん全員がカメラを中心に半円の弧に沿うようにしてぽつぽつと座り、それぞれの間には透明なアクリル板が設けられている。カメラが一人を映せば、他の人は映らない。

ちょうど収録の日が、「渡部さん不倫」のニュースが駆け巡った直後だったようで、みんな「あのニュースで急きょ『奥さん大好き芸人』を企画したわけじゃないですからね！」と必死。おもしろかったのだが、「もしこのメンバーからスキャンダルが出たら大変だ」という発言を受けての、ナイツ・土屋さんの返しが忘れられない。

「いや、あとで一人だけカットしやすいようにこの配置なんじゃな

いです！」

リモート式の新しい日常を象徴する言葉ではないか。

（中略）

今なら、カットは簡単だ。距離をあけているのだから。土屋さんのこの言葉は一座をどっと沸かせていたが、テレビの編集におけるカットにとどまらない意味を含んでいる。すなわち、人々の身体がお互いに離された日常というものは、ある人をたやすく切り取ったり無効化したりできることを意味する。人と人が一体となって存在しているときにあった連続性が、そこにはない。

（中略）

より広い意味で、「ある人々をたやすく切り取ったり無効化したりできる」というのもあるかもしれない。抗議デモは、いくつもの身体が同じ場所に密集しているというヴィジュアル自体が、訴えかける力をもつ。ソーシャル・ディスタンシングでは、それが困難だ。抗議の声は、どうしても弱められる。

「いや、あとで一人だけカットしやすいようにこの配置なんじゃないです！」

一人一人が、分離可能な、切り取り可能な、自空間で生きるいま。五月二五日の雑感とは違って、やっぱりよくない面が多いんじゃないかと、最近は思うようになってきた。（pp.118-120）

お互いに距離をとりあうことで可能になる「ふたつの世界」は、連帯を断絶させてしまう可能性がある。7 月初旬の彼は最終的に以下の結論を出す。

それこそ「早く自粛解除されてまたみんなで集まってワイワイやりたい人」も、「この人っ気のない自粛のひきこもり生活が永遠に続いて欲しい人」も、「基本的には外に出てちょっとは人とも会いたいけどおうち時間も楽しい人」も、「趣味に没頭したいから家に閉じこもりたいけどたまの外出もやぶさかではない人」も、みんなが同じように、少しずつ、満足したり不満を抱えたり負担をしたりして生きる方策を案出する…。もはや不可能に近い神業だが、しかしあくまで、それをめざそうとするのが「共生」という試みなのだろう。二一世紀のキーワードの

一つというべきこの語に対して、初めて澄み切った明確なイメージを持つことができた。（pp.121-122）

彼のエスノグラフィは、コロナ以降急速に提起されるようになった「距離をとること」（大澤 2020）について彼自身の実感をもとに一定の結論を得ている。距離をとることによって安心できることもあれば、社会の断絶が生じることもある。そして、当然のことながら、距離をとる／とらないの二択ではなくて、その間にはグラデーションがある。そのありとあらゆる願いを持った人たちそれぞれが少しずつ生きやすい世界を作っていくことが「共生」なのではないかと締めくくられている。

以上、文集「エスノグラフィを書く」所収のエスノグラフィ 17 編の中から、3 編を選んで内容をかいつまんで分析してきた。細かな分析は別稿に譲るとして、本文集を読んで理解すべきなのは、4 月から 7 月の春夏学期において学部一年生は、極めて多様な捉え方をしており、少なくとも「大学生はみな対面授業を望んでいる」というような認識ではあまりに単純すぎるということである。受講生たちは「大学生らしい生活」ができなくても、懸命に適応しようとしている。中には、気分が落ち込みふさぎ込んでしまっていることを赤裸々に綴ってくれた学生もいる。本文集は、そういった意味で、何が正解かも分からない状況下でかれらが生きてきたことの貴重な記録である。

「大学一年生は入学式もできず、対面授業も受けられずかわいそうだ」と声を上げる人は果たしてどれだけの学生の「生きられた経験」を聞いていただろうか。いったい何をもって「かわいそう」と言っているのだろうか。もちろん、リモート授業のみでは学びが深められないという指摘もあるが、その中でもかれらは、新型コロナウイルスや新たな生活様式とうまく付き合いながら生きていたし、今も模索を続けている。

むしろ、大学として本当に必要なのは、一律的なアンケートだけではなく、かれらの生きられた経験を丁寧に掬い取り、それをもとに当事者である学生たちと話し合うことではないだろうか。本学を含め、多くの大学においてこのような学生の声を聞く場がどれほど設けられてきたかは疑問である。前述のとおり本文集は公開されている。当時の学生たちのリアルな生活記

録を折に触れて見返すことは、多くの教員にとって必要なことであるように思われる。

本文集はあくまでも、本稿著者である宮前が大阪大学で担当した「エスノグラフィを書く」の受講生が書いたオートエスノグラフィ集である。もっと多くの学生が、それぞれの生活を送ってきたことを忘れてはならないだろう。それゆえ、本文集の内容を過度に一般化することはできない。むしろ、求められるのは、一人ひとりのささやかな生活記録をつぶさに聞いていく姿勢であろう。

5. おわりに

さて、本稿の目的は、大学一年生が自粛生活をどのように過ごし、どのように捉えていたのかを明らかにすることであった。本目的の大部分は前章で達せられたが、本章ではそのための方法としてオートエスノグラフィが適切だったかについてまとめておきたい。

結論から言えば、リモート授業として開講するにあたって、オートエスノグラフィは有効だったと考えられる。授業中にフィールドワークに出かけるということができなくなったため、必然的に自習課題としてオートエスノグラフィを書き、それを授業中に講評するという形式を取った。この形式は、いわゆる反転授業に近いやり方であり、リモート授業との相性がよかったように思われる。しかしながら、その前準備として、本講義ではエスノグラフィについての説明や、論文講読の時間に 5 コマ分を費やしており、また授業時間外にもメール等を用いた個別指導を十分に行った上で、課題を与えている。受講生にオートエスノグラフィ執筆の課題を課すためには、このように前準備を丁寧に行うことが必要不可欠である。

実際に授業終了後のアンケートでは、90%以上の受講生が授業の難易度を「ちょうどよい」と回答し、課題の文量については 100％の受講生が「ちょうどよい」と回答した。1 週間平均で 2〜3 時間と決して少なくない課題を課していたことを鑑みれば、多くの学生が高評価を与えてくれた。丁寧な事前指導によって、課題への抵抗感が少なくなっていたのではないかと考えられる。最終的な満足度もアンケート回答者 16 名中 15 名が「かなりそう

思う」、1 名が「ややそう思う」であり、学生の満足度は総じて高かったと言えよう(3)。

最後に、本稿の限界点と展望について数点述べておきたい。本稿では、大阪大学の、しかも「エスノグラフィを書く」という授業に興味を引かれた学生を主な対象としている。そのため、文章を書くのが比較的得意な学生が集まってきていることは否めない。今後は、様々な人に対して「オートエスノグラフィ」を書くためにはどのような指導が必要かなど、対象を広げるための工夫が必要である。

また、学術的な限界として言えば、本稿は、先行研究との位置づけが不十分である。本文集は、いわゆる手記集としても位置づけられるだろう。手記集の研究は、阪神・淡路大震災以降行われており、貴重な研究報告も多い（高森・諏訪 2014; 高森 2017）。東日本大震災から 10 年というタイミングでひろく手記を募集しているということもあり(4)、手記研究はさらなる発展が見込まれる。手記集として本文集「パンデミックを歩く」を再分析することも求められるだろう。

手記集として分析するということは、「オートエスノグラフィ」における集合性を分析することにもつながる。また、本講義においては、締め切りを分けて一人につき 3 編のオートエスノグラフィを課したため、一人ひとりの自己変容過程も分析可能である。本稿で紹介したように「メタエスノグラフィ」と称して自覚的に自らの変容過程そのものを記述した学生もいたり、オートエスノグラフィを執筆するにつれて人称が変化していく学生もいたりした。いずれにせよ、オートエスノグラフィの分野において集合性や自己の変容過程を分析した研究は少なく（宮前 2020）、今後の発展が望まれる。

6. 注

(1) https://twitter.com/haru_yuki_i/status/1263001999970205697
(2) https://twitter.com/LufasMH/status/1263331593537511425。なお、当該ツイートは、上述のはるゆき氏のツイートへのリプライである。
(3) 定性的な評価も大切だろう。受講生たちからのコメントを一部抜粋する。「エスノグラフィーを書いたり読んだりすることで、今までは意識していなかった問題点に気づいたり、自分と真剣に向き合うことができました。コロナに楽しみをたくさん奪われてへこんではいたのですが、こんな状況だからこそ分かる

こと、できることもあるのだと思いました。顔を合わせないからこそ、恥ずかしがることなく自分の内面を詳細に描写できたのかもとも思います。そういう意味ではオンライン授業も悪いことばかりではなかったみたいです。」「様々なものの見方に触れられて良かったです。 コロナ禍の経験を文章にし、共有できたことは貴重な体験だったと思います。 毎回、学生同士で雑談する機会もあり、楽しく受講することができました。 ありがとうございました。」「他の学生のエスノグラフィを読み、感想を共有したり、自分で書いたりするのが楽しかったです。文を書くのが苦手だったのですが、今回の授業で文を書くことに少し慣れることができました。」

(4) http://asttr.jp/feature/shuki/。当ホームページによると、応募資格は特に限定されておらず、「どなたでも応募できます」とのことである。

参照文献

Ellis, C. & Bochner, A. P. 2000. Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.). *Handbook of qualitative research*. (2nd ed.), 733-768. London: Sage.

樋口 耕一 2020 『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版』 京都：ナカニシヤ出版。

厚生労働省 2020 「新型コロナウイルス感染症に関する報道発表資料（発生状況、国内の患者発生、海外の状況、その他）」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00086.html（2020/10/1 アクセス）

宮前 良平 2020 「自粛生活中の集合的オートエスノグラフィの試み」日本質的心理学会第 17 回大会。

岡原 正幸・小倉 康嗣・澤田 唯人・宮下 阿子 2014『感情を生きる――パフォーマティブ社会学へ』東京：慶應大学出版会。

沖潮（原田） 満里子 2013 「対話的な自己エスノグラフィ ―語り合いを通した新たな質的研究の試み」『質的心理学研究』12: 157-175。

大阪大学 2020a 「新型コロナウイルスへの対応について（第 1 報）」https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2020/01/2701（2020/10/1 アクセス）

大阪大学 2020b 「特別措置法に基づく緊急事態宣言への対応について」https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2020/04/0801（2020/10/1 アクセス）

大阪大学全学教育推進機構 2020 「学問への扉」https://www.celas.osaka-u.ac.jp/education/gakumon/（2020/10/1 アクセス）

大澤 真幸 2020 「ポストコロナの神的暴力」大澤真幸著『Thinking O コロナ時代の哲学』pp.8-47、東京：左右社。

高森 順子 2017 「災害の体験を継続的に綴ることに関する試論：阪神・淡路大震災

の手記執筆者の２０年を通して」『共生学ジャーナル』1: 31-52。
高森 順子・諏訪 晃一 2014 「災害体験の手記集の成立過程に関する一考察―「阪神大震災を記録しつづける会」の事例から―」『実験社会心理学研究』54(1): 25-39。
冨安 皓行 2019 「現代日本におけるゲイの親密性の探求―性的／非性的な関係の二分法を超えて―」『共生学ジャーナル』3: 26-53。